

# フローリオとシェイクスピア

正岡 和恵

## はじめに

ジョン・フローリオとウィリアム・シェイクスピア——二人はともにエリザベス朝文芸黄金期に活躍した同時代人である。フローリオは伊英辞典の編纂とモンテーニュの翻訳によって文名を馳せ、先進的なイタリア文化の媒介者として、初期近代イングランドにおける言語文化の洗練に大いに貢献した。フローリオは、シェイクスピアに少なからぬ影響を与えている。本稿では、二人の文人の接点を探ってみたい。だが目的は、直接的な影響関係を考察することにはない。イングランドの文芸復興における特徴的なありかたを体現する二人の遭遇の地点を辿ることによって、イギリス・ルネサンス最盛期に循環していた未曾有の言語的エネルギーの一端を浮かびあがらせることに、本稿の関心はある。

## 1 人と人との間で

シェイクスピアはフローリオのテキストを知っていた。だが人間はどうだろう。シェイクスピアがイタリア語の材源を入手した経路の一つとして、フローリオはしばしば言及されてきたが、二人の親交を示す直接的な証拠はいまだ発見されていない。だが、間接的な証拠ならばあまたある。一つはサウサンプトン伯ヘンリー・リズリーとのつながりである。伯爵は、フローリオが『言葉の世界』（一五九八年）を献呈した三人の貴人のうちの一人であり、献辞では「その給金と庇護のもとで数年間を過ごした」と記され、「私や私の辞書がもうこれ以上役に立たないほどの熟達ぶりで、これ以上教えることも学ぶこともできないほどイタリア語を自国でしっかり身に付けておられるので・・・」と書かれている。それゆえ彼は、明らかに、フローリオのパトロンであり弟子であった。フローリオは、伯爵のイタリア語家庭教師として、おそらくは屋敷に住み込んでいたのだろう。シェイクスピアにとって伯爵は、『ヴィーナスとアドニス』（一五九三年）と『ルークリース凌辱』（一五九四年）を献呈した相手であり<sup>(注1)</sup>、『ソネット集』の献辞にある W・H 氏とも詩中

の美貌の青年のモデルとも推測されている。

また、ペンブルック伯爵家とのつながりもある。第二代ペンブルック伯ヘンリー・ハーバートの最初の妻の姉は、フローリオの父親ミカエル・アンジェロにイタリア語を教わったジェイン・グレイであり、彼の文法規則集は伯爵とレイディ・ジェインに献じられている。また第三代ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートの家庭教師を務めたのがフローリオの友人であり義兄弟ともされるサミュエル・ダニエルであり、フローリオは遺言書のなかでウィリアムに蔵書を遺贈した。このように、フローリオは父子二代にわたってペンブルック伯爵家と関わりをもち続けた。シェイクスピアも、伯爵父子には縁がある。第二代ヘンリーをパトロンとするペンブルック伯一座に駆け出しのシェイクスピアが所属していたという説があるし、死後出版されたシェイクスピアの『第1・二つ折本』は、第三代ウィリアム（彼をW・H氏とする説もある）とその弟の、後に第四代ペンブルック伯となるモンゴメリー伯フィリップに捧げられ、献辞によればこれらの「比類なき二人の兄弟」はシェイクスピアの芝居を好み多くの愛顧を与えたとされる。ペンブルック伯爵父子およびフィリップ・シドニーの妹である第二代伯爵夫人メアリは著名な文芸庇護者であり、イギリス・ルネサンス期の綺羅星のごとき文人たちを惹きつけていた。シェイクスピアとフローリオが、こうした有力なパトロンのサークルで出会ったという可能性は大いにある。

二人はまた、書籍商も共有していた。エドワード・ブラウントはフローリオの『言葉の世界』と『エッセー』の版元であり、シェイクスピアの『第1・二つ折本』の出版者の一人でもある。また、フローリオの死後に出版された『エッセー』第三版（一六三二年）には、『第一・二つ折本』のあの有名なシェイクスピアの肖像画を制作したマーティン・ドルーシャウトの銅版画が収められている。さらに、最も有力な仲立ちとして、ベン・ジョンソンは、二人の共通の友人であった。彼はこの最初のシェイクスピア全集に追悼詩を寄せ、『ヴォルポーネ』の刊本に、「わが親愛なる父にしてかけがえなき友たるジョン・フローリオ殿へ——わが詩神の助け手」と自筆で記した<sup>(注2)</sup>（おそらく彼は執筆時にヴェニスの知識をフローリオから得て、その本をフローリオに贈呈したのだろう）。さらにはフローリオがアン王妃の個人秘書を務めていたとき、シェイクスピアもまた公的な身分は国王の侍従であったし、御前公演で宮廷に出入りすることもあっただろう。二人が『マクベス』の宮廷上演

のときに顔を合わせていたり<sup>(注3)</sup>、宮廷仮面劇の準備のためにフローリオのもとを訪れていたベン・ジョンソンが<sup>(注4)</sup>、シェイクスピアの噂をしていたかもしれない。

人と人との出会いは純然たる偶然によることもあるし、必然が作用していることもある。だが、このように事実のみを拾っても、当時のロンドンの文壇がいかに狭かったかということに思いを馳せずにはいられない。とりわけ二人とも、庇護の最大の源泉である宮廷にきわめて近い場で仕事をしていたので、むしろ出会わずにいるほうが驚きである。文人たちは、庇護者、仕事上のつながり、姻戚関係、交友関係、出身地などをつうじて緊密なネットワークを形成していた。フローリオがそうした人物交流網の一つの結節点であったことは間違いない。というのも彼は、モンテーニュの翻訳や伊英辞典の編纂によって文芸世界では有名な人物であったし、一五年にわたってアン王妃に仕え、王族貴顕にイタリア語を教えることで、「当時の大物のたいていの名前が見出される彼の巨大な人脈」(イエイツ 7)を築いてきたからである。フローリオとシェイクスピアが活動していた社会と文芸のサークルはどこかで重なっているか、共通の友人知人を介して繋がっていた。二人の道が交わらないはずはなく、たがいを見知っていたと考えるほうが理にかなっているであろう。

## 2 テクストのなかで

フローリオを思わせる声はシェイクスピアの作品のあちこちで響いている。最初期のものとしては、『恋の骨折り損』でホロファーニーズが語る「ヴェネツィアよ、ヴェネツィアよ／汝を見ざれば、汝を称えることはかなわじ」(四幕二場九五―九六行)や、『じゃじゃ馬馴らし』でルーセンシオが語る「偉大なるイタリアの快い園／ロンバルディア」(一幕一場三―四行)であり、これらと同様の言い回しがフローリオの『第一の果実』と『第二の果実』にも見られる。とりわけ『じゃじゃ馬馴らし』には、フローリオの両教本に記されているような挨拶などのイタリア語の決まり文句が随所に見られ、この劇にイタリア色を添えている。後年の最も有名な類似箇所は、『テンペスト』でゴンザーローがユートピア論を開陳する台詞であり、それが『エセー』のフローリオ訳からの借用であることはまず確かである。ワイアットは、『じゃじゃ馬馴らし』から『オセロー』に至るまでの諸劇にさまざまな類似

箇所が見られるとし、二つの劇を隔てる一〇年ほどの間に、シェイクスピアが『第一の果实』から『第二の果实』まで読み進めていったのではないかと推測している(124-26)。シェイクスピアの座右の書として、『英雄列伝』や『変身物語』の英訳版とともに、フローリオの語学教本、伊英辞典、『エッセー』翻訳書を含めるのはけっして的外れではあるまい。

だがおそらく、シェイクスピアとフローリオの交流を最も強くほのめかしているのは、『恋の骨折り損』であろう。まずここには、有名なモデル問題がある。すなわち、学校教師のホロファーニーズのモデルがフローリオであるとされる問題である。ホロファーニーズはラテン語や近代諸語をもったいぶって口にする術学者として造型されている。格言めいた言い回しを好むうえ、彼が口にするヴェニスについての格言は『第一の果实』からの引用である<sup>(注5)</sup>。フローリオがこの人物のモデルであると最初に示唆したのは一八世紀の編纂者ウォーバートンであった。彼が編纂した八巻本のシェイクスピア全集(一七四七年)には以下の注釈がある。

というのも、ホロファーニーズにはある特定の個人が意図されているからであり、それはわれらが作者と同時代人の術学者にして学校教師、ジョン・フローリオなる人物であるが、この者はロンドンのイタリア語教師であり、『言葉の世界』と題されたイタリア語辞典を著わした・・・(Yates 13に引用されている)

イエイツは、『恋の骨折り損研究』において、フローリオ＝ホロファーニーズ説をめぐるおよそ二世紀にわたる議論の系譜を辿っている。それは状況証拠の積み重ねのような議論であるが、『ソネット集』の若者や黒い女が誰なのかということと同様、モデル探しはわれわれを魅惑してやまない。テキストの靈感源を特定の材源や出来事に求めるのではなく、文化間の交換や交渉というより広いプロセスのなかに置き、テキストが複雑な諸力の生成物であることが明らかになった今日においてもなお、モデル探しはわれわれの好奇心に訴える。ホロファーニーズは、コメディヤ・デラルテの人物類型の一つであるドットーレに由来するとも、グラマー・スクールの教師の戯画であるともされているが、そうした無個性な知識人のカリカチュアとするには、あまりにも人間臭い。彼にある種の個人的なオーラを与えているのがフローリ

オであるとすれば(シェイクスピアは『恋の骨折り損』の執筆時期にサウサンプトン伯爵邸で彼と寝食をともにしていた可能性もある)、たとえ好事家的な興味でしかなくとも、考えてみるのは有益である。というのも、テキストと同様、人は思想を媒介するからであり、シェイクスピアを取り巻く人間のネットワークを想像してみることは、彼を取り巻く言語的環境に思いを馳せるきっかけになるからである。

『恋の骨折り損』においては、言語的気取りとともに知的気取りも諷刺される。そしてアーサー・アチソン以来、代々の批評家たちはここにもモデルを見出してきた。それはウォルター・ローリーが率いる「夜の学派」であり、ローリー自身は銜学癖のスペイン人アーマードーに擬せられているとされる。ローリーは、数学者のハリオットや劇作家のマーロウを含む新思想に関心をもつ人々と会合をもち、天文学、神学、哲学、錬金術など幅広い分野にわたって、懐疑的かつ合理的な視点から論じ合っていた。彼らの思弁的論議は無神論と同一視され、人々の口にのぼるようになり、一五九四年には枢密院がローリーの屋敷近くの町サーン・アバスで調査委員会を開き、主要なメンバーを取り調べた。バインズの「誹謗書」など、グループを異端であると非難するいくつかの資料は、マーロウが死んだ一五九三年の前後に集中している。これは『恋の骨折り損』の推定創作年代に重なっている。また、ローリーはサウサンプトンとエセックスの形成する派閥に敵対していたとされる。無神論の噂がかまびすしくなり、世間が興味を抱いているあいだに、己のパトロンに対立するローリーとその一派を揶揄しようとシェイクスピアが考えたというのは、蓋然性の高い推論である。「夜の学派」という命名は、ナヴァール王の台詞「黒は地獄のしるし／地下牢と夜の学派の色である」(四幕三場二五〇-五一)行)に由来しており、schoolが別の語に校訂されている版もあるが、アーデン版第三シリーズの編者Woudhuysenは「おそらくは校訂しないままのほうがよいのだろう」としてschoolを採用している<sup>(注6)</sup>。(216)想像をさらにふくらませていけば、人物相関図の糸はさらに伸びていく。九〇年代前半に悪名を轟かせたこの急進思想の集いを、植民地事業で多忙を極めていたローリーがいつ頃から主催していたのかは定かではないが、イエイツは、ブルーノのロンドン滞在中(一五八三-一五八五年)にその萌芽があるのではないかと示唆している。(100-01)ブルーノは二つの対話篇をシドニーに献呈しており、さらには、コペルニクス説を討議した架空の晩餐会はフル

ク・グレヴィル邸で行われたことになっている。それゆえ、グレヴィルを含むシドニー・サークルの面々やローリーなど新思想に関心をもつイングランドの貴族や知識人たちが集まり、『聖灰日の晩餐』で描かれているような新しい宇宙観をめぐる論議が、ブルーノを囲んで行われていても意外ではない。ブルーノはフランス大使館に寄寓していたが、そこにはフローリオが勤務しており、二人は大いに交遊があった。さらに、フローリオはフランス大使からの伝言を携えてローリーのもとへ赴いたこともある。

もつれからむ人物交流の糸——イェイツは『恋の骨折り損研究』において、人物相関の絵図をあぶりだした。この劇が特定の個人や事件を想定したきわめて時事的な芝居であると、同時代のフランスの出来事、夜の学派、フローリオ、エリオット、チャップマンらも巻き込んだハーヴィ＝ナッシュ論争に言及しているとしたのである。たしかにこの劇には、シェイクスピアの他の喜劇と比べてもどこか異質なところがある。批評史を振り返ってみると、この劇の特殊性はおおむね二つの点に求められる。一つはイェイツが着目した時事性の高さであり、材源が特定されていないことも相俟って、モデル問題を引き起こす余地を生じさせた。もう一つは、まさに「言語の大饗宴」と言えるほど、アクションよりも言葉が優先されていることである。登場人物は饒舌に語り、ときには節度のない言葉遊びでプロットの流れを阻害する。誓いをたて、誓いを破り、破った誓いを正当化し、ソネットを書き、それを批評し、機智をたたかわせ、余興を企画する——この劇では、言葉が行為なのである。地口、洒落、諺、誓い、マラプロピズム、機智合戦など、さまざまな言語形態が見られるうえ、韻文詩が多いのもこの劇の特徴である。すなわち『恋の骨折り損』においては、様式化された言語にたいする強い関心が示されており、シェイクスピアは、人工的で修辭的な言語を一方では揶揄しつつも、一方ではあれこれと試しながら、己れの劇的言語がいかなるかたちをとるべきかを探っている。劇中に窺える術学や学者気質へのあてこすりは、様式化されすぎて形骸化した言葉や思想への批判とも考えられる。だが作家の技を創るのも、既存の様式や形式をつうじてである。言葉の達人ビルーンも、フローリオが得意としたような「琥珀織の美辞麗句」(五幕二場四〇六行)を知らなければ、「実直な手織言葉」(四一三行)を学ぶことはできないのだ。シェイクスピアはやがて、定型に目配りしつつ、定型としての常套化を免れた「生ける技法」を模索していくことになるが、九〇年代半ばの新進劇作家

のこの喜劇から感じられるのは、「琥珀織」であれ「手織」であれ、言語を操り、言語で遊び、言語に感溺することの喜びである。過剰なまでの言語遊戯は、ときに、この劇を未熟な劇作家の拙作であると批評家たちに思わせてきた。だがこの劇はまぎれもない言語実験場であり、エリザベス朝の混沌とした言語的エネルギーを最もよく伝えている作品である。

### 3 言語実践——ペトラルキズムから始めて

『恋の骨折り損』でからかわれていたような、様式化された言語、内面化をはばまれた言語、ということからわれわれが真っ先に想起するのはペトラルキズムである。シドニーの『アストロフェルとステラ』に始まり、九〇年代前半を席卷した恋愛ソネットの大流行にシェイクスピアは、言うまでもなく、大いに関わっていたし、フローリオも目配りを忘れていない。ペトラルカに発し汎ヨーロッパ的に流行したこの文学慣習が北方の島国に到達したとき、それはすでに高度に定式化された恋愛の修辞やエトスをもっていた。定式は陳腐化を招くいっぽう、新たな創造の機会をも与える。言語と思想における可能性とも枷ともなるペトラルキズムの伝統に、二人の言語の名匠はいかに反応したのだろうか。だが、まずはブルーノから語ろう。

ブルーノは二冊の本をシドニーに献呈したが、『英雄的狂気について』（一五八五年）の献辞において、ペトラルキズムとその追隨者を例の激烈な口調で攻撃した。「女性の肉体の美について普通の熱意を注ぎ、好奇心に満ちた想いを巡らし続けること」（加藤訳、3）は、卑しくもおぞましいことである、と。まこと、反ペトラルカの言説の典型のごとく響くが、この対話篇の眼目は女性を台座から引きずりおろすことではない。ブルーノはたしかに女性崇拜を否定したが、というのも彼の愛は女性にではなく、魂を浄化し高みへと向かわせる神的なるものにあるからである。対話の随所にちりばめられたソネットは、一見すると常套的なペトラルカ風恋愛詩のようであるが、そこに付された解説によって、ペトラルキズムの慣習が異なる愛の文脈のなかで作用していることがわかる。彼は、伝統的なペトラルキズムの修辞を用いて、イデア的な世界への熱狂を語ったのだ。これは不滅の叡知への憧憬について語る哲学的思弁であり、やがてソネット流行の先鞭をつけることになるシドニーは、不快に思うというよりは、イエイツが述べたように、むしろ地上の愛から天上の愛へという新プラトン主義的な含蓄に心惹かれたことで

あろう<sup>(注7)</sup>。ソネット流行を準備した八〇年代後半、エリザベス朝の著名な詩人たちは、新プラトン主義的な愛の理念をいかに英詩に移植するかという問題と取り組んでいた。スペンサーやダニエルも、おそらくはこの本を興味深く読んだに違いない。

それから六年後、ソネット連作が大ブームになりつつある頃、フローリオは『第二の果実』において、伊達男がソネット作りに励むのを「流行病」と皮肉りながら、恋愛と女性に最終章を当て、かなりの紙幅を割いてこの主題について論じた。フローリオが著わした二冊のイタリア語手引書は、語学教本であるとともに作法書でもあった。それは、いかに振舞うべきか、いかに話すべきかを教える紳士造りの指南書であり、紳士にふさわしい話題を諺や名句、文飾や修辞を駆使して優雅にまた機智的に語るための実例集としても機能していた。『第一の果実』と『第二の果実』には一三年の隔たりがあり、そのあいだにイタリア文化の影響はエドワード六世時代の神学的要素を払拭し、ヘンリー八世時代の人文主義的なものへと回帰していた。そのため『第二の果実』では、『第一の果実』のピューリタン口調は影をひそめ、主題もより世俗的で、社会的優雅さの習得が打ち出されている。第一二章において、話者たちは、フローリオの言葉によれば「恋愛と女性について格言風に愉しく夜を語り明かし、今日一日の仕事を締めくくる」。この章は、恋愛について話者たちが自説を開陳するプラトン風の一夜の饗宴なのである。女性を悪徳の根源とするパンドルフォ。「獣的な愛」と「天上的な愛」を区別し、この地上にも例外的に貞節で学識ある女神のような女性たちがいるとするシルヴェストロ。フローリオは、格言、警句、引用句、暗示引用をそれこそ無尽蔵に繰り出して、この伝統的な主題についての蘊蓄を傾ける。イングランドにおいてペトラルカ風恋愛詩はいまや旬の素材である。この章は、とりわけ指南の趣が強い。それは、女性讃美と反ペトラルカ的な女性嫌悪の言説のあいだを揺れ動くルネサンスの恋愛談議をまとめた要約版であり、ソネット詩作に関心をもつ同時代人のための素材集であり、さらには紳士が恋愛について気のきいた会話をするための教材である。この章を読むと、話者たちの生き生きした会話のなかに、フローリオがこの由緒ある話題を熟知しており、楽しみながら筆を揮っていることが感じられる。彼のここでの目的は自説を開陳することではなく、文体と話題、そして社会的振舞いにおける有用な作法を読者に供することである。イタリア語の個人教授が、フローリオの生涯

変わらぬ生計の糧であったことを思えば、この章からは、時流に合わせて学習者の興味を引きつける工夫を怠らないフローリオの教師としての顔が垣間見える。

シェイクスピアは、フローリオの二冊の手引書を知っていたと思われるが、ソネット創作にあたって、フローリオのこの章を参考にしたかどうかはわからない。だが、直接的な類似箇所は見当たらずとも、明らかなのは、二人がルネサンス文化に広く流通している恋愛をめぐる言説や概念に、ほぼ同時期にアクセスし、それを独自の方法で借入し、己れの目的に応じて再利用したことである。シェイクスピアの『ソネット集』の創作年代については諸説あるが、シドニーにはじまり、ダニエル、ドレイトン、スペンサーなどの詩人がソネット連作に手を染めた、九〇年代前半のソネット・ブームの流れのなかで書かれたことは確かである。言うまでもなく、シェイクスピアは『ソネット集』において、また、この詩集の演劇版とも言える『ロミオとジュリエット』において、ペトラルカ風恋愛詩の慣習を利用しつつ、それを疑義に付し覆して常套に新しい生命を吹き込んでいる。この批判的摂取にはとりわけ、定型化し硬化した言葉を問題としつつ、鋳型からいかに言葉を解放するかという意識が見られる。それは『恋の骨折り損』（やはりソネット流行期に書かれたと推定され、劇中でも紋切型のソネットが揶揄されている）における主要な関心事でもあるし、ルネサンスの文学伝統を継承しつつそれに抗いながら創作したシェイクスピアの持続的な課題でもあった。そして、私がフローリオとの共通点を見るのも、そこ——すなわち、言葉の可塑性に対するあくなき関心——なのである。それはたんなる職業上のものではなく、初期近代イングランドという場所と時代にとっての特有の課題でもあった。

ふたたび、ソネットへと戻ろう。ブルーノは『英雄的熱狂』においてペトラルキズムの伝統を攻撃したが、それは恋愛詩の形骸化した言語への攻撃でもあった。というのも、ブルーノは、「銜学を、そして意味を犠牲にした言葉への偏愛を憎んでいたので、ペトラルカ風詩人の気取りを学者連中のこじつけとほぼ同じくらい嫌っていた」（イエイツ 96）。『聖灰日の晩餐』や『驕れる野獣の追放』に示されているように、銜学、そして銜学的な文法家の語る実のない言葉は、ブルーノが生命を賭して戦った敵であった。一五八三年のオックスフォードでの公開討論会や、『聖灰日の晩餐』に描かれているような談論の場には、実際にフローリオも同席しており、友人が古い誤謬に固

執する人々を相手に激論を繰り広げるさまを見ていたに違いない。ブルーノはフローリオにどのような影響を与えたのだろうか。影響の直接的な証拠は、言語的なものである。『カンデライオ』に示されているように、ブルーノはフローリオに劣らぬ言葉の創造的な操り手である。そしてフローリオは友人の著作から語彙や格言を幅広く借用した。彼が蒙った恩義は、ブルーノがロンドン滞在中に次々に上梓した主要著書を五作、『アン王妃の言葉の世界』の文献リストに含めることによって認知される。言語観という、より広い文脈で考えるなら、私が思うに、この二人のイタリア人のあいだには、フローリオとシェイクスピアのあいだに認められるような、空疎な言語への抵抗があった。フローリオの場合、それは言語純化への抗いとして表出する。

彼の伊英辞典は、二つの版（一五九九年の『言葉の世界』と、その増補改訂版である一六一三年の『アン王妃の言葉の世界』）ともに、時代と空間という二つの点において革新的であった。一つには、偉大な過去の言語実践のみならず、同時代作家の語彙も収録し、一六世紀のイタリア語著作が読めるようにしたこと。もう一つは、トスカーナ語以外の地方語（ナポリ語源の語はブルーノから教わったのかもしれない）がかなりの部分を占めていることである。ふたたび、これは画期的なことであった。というのも、一六世紀後半のイタリア半島では、パウロ四世が『禁書目録』（一五五九年）を公布するなど教会はいちじるしく反動化していたうえ、一五八三年にはフィレンツェにクルスカ学会が設立され、言語とその産出物を統制し「純化する」流れが顕在化していたからである。

辞書編纂について言えば、国家として統一されていなかったイタリアでは、地方語がせめぎあい、共通語の創出が課題となっていた。一六世紀初頭にかまびすしくなった「言語の問題」（Questione della Lingua）をめぐる論争の結果として、一四世紀のトスカーナ語を基盤としてイタリアの共通語を形成するという方向が定まり、それを受けてイタリア語辞書編纂もトスカーナ語に、とりわけ初期ルネサンスの三大作家の用いた語彙に特化するという流れになる。たとえば、フローリオが両方の辞書で参考文献として挙げているアルノの『俗語の豊かさ』<sup>(注8)</sup>（一五四三年）や『世界の構造』（一五四八年）もその流れのなかにあったし、『アン王妃の言葉の世界』が出版される前年の一六一二年には、『クルスカ学会編イタリア語大辞典』が出版された。クルスカ学会は、その名称（クルスカは麩すなわち滓や不純物を意味する）が示

峻するように、イタリア語の純化という目的のもとで発展してきた団体である。クルスカ辞書は純正主義の精華ともいえるもので、標準語としてのトスカーナ語の地位を盤石にするとともに、ヨーロッパにおける初めての国語辞典として言語アカデミー思想の先駆となった。イングランドに目を転じれば、伊英辞典ということでは、フローリオの先人は一人しかいない。一五五〇年、ウィリアム・トマスは、イングランドで最初のイタリア語文法書にして伊英辞典（文法のセクションのあとに辞書を付したもの）を著わし、テューダー朝における第二波イタリア学の出発点を画した。この辞書は人気があり、その後一七二四年までに四版を重ねたが、収録語彙は慣行にたがわず、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョに限られていた。そこに現れるのがフローリオの辞典である。

明らかに、フローリオの意図は、「正しい」トスカーナ標準語を習得することにはなかった。多彩な地方語を収録し、猥褻で悪名高いアレティーノを含む同時代の作家の語彙を語釈し、百科事典さながらに多岐にわたる主題を扱うことによって、彼の二冊の辞書は、イタリアで主流となった保守的な言語政策にまっこうから逆らっている。辞書の表題が示すように、フローリオが創ろうとしていたのは、たんなる語のリストではない。彼の目的は、イタリア語の多様な豊かさや異種混淆的な活力を網羅し、学芸の所産すべてを包括するような「言葉の世界」を提示することにあった。

これらの辞書は、英語の豊かさも示している。フローリオは、一つのイタリア語の単語に対して英語の類義語をたたみかけるように繰り出してくる。たとえば、*resolute* は彼が自らを冠するのに用いた形容詞（「不屈のジョン・フローリオ」）であるが、この語には思い入れもあったのだろう、イタリア語の *risoluto* に対して英語の類義語が *resolute* も含め二七個も示されている。（*A Worlde of Wordes* 329）一頁が三欄に仕切られた彼の辞書を繰っていると、言葉を扱う喜びがまざまざと伝わってくるし、おそらくはイングランド人の母語話者を凌ごうとする気概もそこから感じとれるかもしれない（Pfister 49）。イタリア語においても英語においても、フローリオの辞書は、語彙の範疇も収録数も広範であり、従来の辞書編纂の慣行に背くまったく異なる言語観から創られたことは確かである。

ルネサンスは、近代諸言語がラテン語にかわる文芸および学問の言語として、頭角を現してくる時代である。しかしながら、フローリオの辞典に見ら

れるこの横溢、このコピーはまた、初期近代イングランドという特定の時代と場所が創り出したものでもあった。言語の問題は政治の問題と関わっている。一六世紀後半、イングランドは近代国家としての地歩を急速に固めつつあり、国家としての自己形成と関連して、やはり「言語の問題」が浮上していた。イングランドの場合、その問題の根幹にあるのは自国語すなわち英語の貧しさである。シェイクスピアは、求婚者のイングランド貴族について、ポーシアに辛辣な言葉を吐かせている。

どう思うもなにも、お話ができませんもの。たがいの  
言葉がわからないのだから。あの方は、ラテン語も、フランス語も、  
イタリア語もおわかりにならない・・・（一幕二場六四一六六行）

言語の貧しさは文化の貧しさに通じている。というのもこの後には、「胴衣はイタリアで、膨らませた半ズボンフランスで、帽子はドイツで、立ち居振る舞いはあちこちでお買いになった」（六九一七一行）という台詞が続くからである。

フローリオとブルーノもポーシアの批判を裏付けている。『第一の果实』の対話二七番と、同様の批判がより激烈に記されているブルーノの『聖灰日の晩餐』対話二番を見てみよう。二七番の主題は学識の重要さであり、フローリオは故事来歴に満ちた長口舌を揮って古典の学識を讃美する。その前置きをなしているのが、イングランド人の言語や作法に対する不満である。ブルーノの二番は、五篇の対話からなるこの不穏な書物の本題をなすコペルニクス説をめぐる議論にさしはさまれており、フローリオもともにしたグレヴィル邸への厄介な道行と、イングランドの民衆の野蛮さについて語っている。さらには、それに続く本体の討議においても、オックスフォードの学者たちの無知蒙昧ぶりが容赦なく暴かれている。フローリオの対話にせよブルーノの対話にせよ、これらの細部はきわめてリアリスティックであり、抽象的な論題と一見噛み合っていないようであるが、文化的に洗練された教養あるイタリア人が、イングランドの文明度の低さを嘆くという構図は同じである。両者がともに批判していることが二つある。

まず、外国人に対して無作法に振舞うこと。話者の一人のテオフィロ（ブルーノの代弁者と考えられる）は、エリザベス女王から始めて幾人かの主要

な貴族たちを礼節の鑑として褒め讃えたあと、口調は一転、大半の民衆がいかに野蛮で獣じみているかを語る。とりわけ紳士階級に属さない従者や下働きの召使いは熊や狼のように獐猛であり、外国人を目にするや、出くわしたのが運の尽きとばかり狼藉に及ぶ。『聖灰日の晩餐』で目的地へと向かう道中、チャリング・クロス付近でブルーノを殴ったのもこのような手合いだろう。しかもブルーノは、現存する最も古い肖像画を見たところ(1715年の銅版画)、無知な民衆が教皇主義を想起するようないかにもラテン系らしい風貌をしているのだ。このエピソードが現実の出来事にもとづいているのかどうかは定かではないが<sup>(注9)</sup>、外国人がイングランドの民衆から当時どのような扱いを受けたかという雰囲気は伝わってくる。無作法ということでは、対話の最後で〈友愛の杯〉という、同席した人々が一つの杯を回し飲む習慣も不潔で唾棄すべきものであるとしている。だが幸いなことに、高位貴顕の人々が集う上品な席だったせいであろう、この晩餐会ではそうしたことは起こらなかった。

フローリオがイングランド批判の槍玉にあげるのが、英語である。「イングランド生まれのイタリア人」であり、複数の言葉を媒介することによって生計を立てていたフローリオにとって、言葉にこだわること、そして、自らのアイデンティティと生業の基盤をなす英語にこだわることは当然であっただろう。フローリオは二七番で、借用語だらけの混淆言語である英語は好きではない、ドーヴァーの向こうでは役に立たない地方語である、しかるにイングランドの親たちは外国嫌いゆえに子供たちに近代諸語を教えようとしな、と述べる。ブルーノも、対話三番で同じことを逆の視点から語っている。彼がなぜ英語を学ぼうとしないかと言えば、それは英語がこの島国でしか通用せず、日頃付き合いがあるような立派な紳士たちはみな、「母国語以外の言語を知らないのは野蛮人である」(136)と考え、ラテン語、フランス語、スペイン語、イタリア語のいずれかを話すからである(『聖灰日の晩餐会』の議論はラテン語で行われた)。

二人とも異邦人としてイングランドの言語と文化を相対化する視点をもっていたが、彼らのイングランド批判にはイタリア人としての文化的優越感がつねにつきまとっていた。ブルーノがイングランド社会を好んでいなかったのは明らかである。だが彼は、大陸での遍歴の合間に二年半、この国に滞在していたにすぎない。フローリオはそうではない。フローリオは、批判もし

たが貢献もした。彼は、イングランドで生まれ、青年期に大陸から戻ってきて、その後はずっと生国で過ごした。才能にも長寿にも恵まれた彼は、エリザベス朝とジェームズ朝の文芸黄金期を生き抜き、文人としてイタリア文化の媒介者として、イングランドの言語と文化の文明化の過程を促しもしたのである。

ポーシアの台詞には、フローリオが蔑んだ島国根性で外国人嫌いのイングランド人の姿がある。それはイングランド人が自らを外国人の眼差しをもって描いた戯画であるが（ポーシアに求婚する資格をもつ貴族ならば、少なくともラテン語を知らないことはありえない）、その根底には自国の言語と文化の乏しさへの諧謔的な認識があった。だがシェイクスピアがポーシアにこの台詞を吐かせた九〇年代半ばには近代諸語を学ぶことの重要性が認識され、それとともに英語は飛躍的に文明化されつつあった。

書き言葉として英語が後進の言語であることには、ノルマン・コンクエストに起因する歴史的要因が存在する。チョーサーが英語で書くことによって国語の形成に大きく貢献できたのも、フランス詩やイタリア詩というモデルが存在していたからであるが、イギリス・ルネサンス期においても大陸諸語の芸術媒体としての先進性や、学問言語としてのラテン語の優位性という構図はさほど変化していない。だが時代は着実に変化していた。

まず、背景について語ろう。一六世紀後半のイングランドでは、国際舞台における影響力や交易網の拡大にともない、近代諸語、とりわけイタリア語とフランス語の有用性が増大し、ラテン語の優位の座を脅かしつつあった。エリザベス朝は、ルネサンス精神が中産階級にまで浸透していった時代である。それは勃興しつつある階級であった。自らのジェントリ化をはかろうとする市民階層は、大陸の先進文化を吸収し、生まれではなく教育によって道を切り開こうとしていた。彼らにとって、人文主義的情熱は、社会的成功という野心と結びついていた。翻訳はイングランドにルネサンス文化を伝播する主要な手段の一つであり、カステリオーネ、デッラ・カーサ、グアッツォの作法書もこの時代に次々に英訳されたが<sup>(註10)</sup>、これらの書物は、人格陶冶の書であるとともに、紳士指南の手引書としての実用性も備えていた。とりわけ『宮廷人』は、翻訳をつうじてヨーロッパで広く流通し、洗練が教育によって培われるという理念を提示することによって、教養人であることを重要な資質とするイングランドの紳士像の形成に貢献することになる。ルネサンス

の教養熱は、外国語学習熱ももたらしてきた。近代語に堪能であることは、翻訳に頼らないで文化資源に直接アクセスできることを意味したし、先に触れたように政治・外交商業の分野においてその実利性は増大し、出世のために欠かせない資質であるとみなされるようになっていたからである。おりしも一六世紀後半は、大陸での宗教迫害が激化した時代にあたり、フランスからはユグノーが、フランドルからはアルバ公の弾圧を逃れた人々がプロテスタント宗教難民として流入し、ロンドンに国際的な多様性をもたらしていた。亡命者のなかには語学教授で生計を立て、個人教授だけではなく、聖ポール寺院学校の境内で語学学校を開いたり、文法書や語学教本を出版する者も現れた。ジョン・エリオットは『オーソエピア・ガリカ』（一五九三年）の前置きに「その名も高きロンドンの都の、学識あるフランス語教授諸氏へ」において、そうした難民教師たちを揶揄している。

教授諸君、フランスからどのようなニュースが来ておりますかな。相変わらず、戦争、戦争のことばかり。まこと聞くだに胸塞がれる思いです。しかしながらあなたがたが健康で、沢山のお弟子を抱え、クラウン貨をたんまり手にし、よいワインを飲んでいらっしゃるのであれば、それはまことに結構なこと、天におわす善き神がそのようにずっとお計らい下さることを願うばかりです。(A3)

このフランス語対話教本は三部に分かれ、第一部の最初の対話は儲け主義で高慢なイタリア人やフランス人の亡命語学教師を罵っている。ラブレー風のお喋りが繰り返される第二部と第三部では、ホリバンド、ステップニー、フローリオなどの対話教本がパロディ化され、とりわけフローリオの二冊の対話教本は一貫して執拗な諷刺の的になった。一五九〇年代初期には外国人排斥運動が高まりを見せ、一五一七年の「悪しきメイデイ」を思い起こさせるような不穏な空気が漂っていた。エリオットの教本もそうした雰囲気の中かで、外国人教師（彼らは近代語教授の仕事を独占していた）への敵意から書かれたものと思われる。とともに、この奇書から窺えるのは、パロディ版が書けるほど語学教本の内容や体裁がよく知られていたうえ、嫉妬されるほど羽振りのよい者が外国人語学教師のなかにいたことである。ヨーロッパ世界における国際政治の力学がイングランドに言語習得の実利性をもたらし、

需要を生み、さらには供給ももたらしてきたというわけである。

語学教本の隆盛が証しする近代語への関心は、エリザベス朝イングランドにおける学問復興を大いに促進することになった。その一角をなすものとして、フローリオがモンテーニュの英訳によって貢献した翻訳も加えることができるだろう。ルネサンスにおいて、翻訳は知の継承を支える基本的な活動である。そして、エリザベス朝イングランドの翻訳文化も活況を呈していた。最北端のこの島国がルネサンスの最盛期を迎えたとき、そこにはすでに、ギリシア・ローマの古典のみならず、ルネサンス先進諸国の自国語による著作が存在していた。ラテン語とともに、イタリア語やフランス語を中心とする近代諸語で記述された膨大な新しい知識が、ときには重訳を経て英語に翻訳された。だが、翻訳がもたらしてきたのは知識だけではなかった。辞書や教本と同様、翻訳も文化と言語の自己形成に関わっている。後進性の意識に裏打ちされた洗練への欲求は、人文主義的知識を伝播する言語への関心を促した。そしてこの言語への全般的な関心は、つまるところ、後進の言語である自国語を洗練させ、その創造的な行使を促し、文芸世界を活性化させることになるのである。

一五九〇年代——シェイクスピアが劇作家としてのキャリアを始動させたエリザベス朝後期、イングランドの文芸世界はまさに大いに沸き立っていた。フローリオは『第二の果実』（一五九一年）の献辞において、活況を以下のように伝えている。

この芽生えの時節、創意盛んな実りの時期にあって、茨の繁みはことごとく実をつけ、土竜塚のどれもが冬の暗鬱な衣を脱ぎ捨て、あらゆる人間は己れの空想を養うことにせわしなく励んでおります・・・かく申す私も、この時節に何としてもぜひ身を投じ、増えれども益のない雑草となるか、益あれど興趣なき健やかな香草となるか、試みたいと存じます。(A2)

フローリオは「創意盛んな実り」が何であるかを軽妙な口調で列挙するが、そこには時事ニュース、パンフレット、ソネット、演劇、騎士道ロマンスの翻訳など、さまざまなジャンルが含まれている。そして、疑いなく、フローリオの『第二の果実』もイングランドの言語文化の活況から生まれ、またその活況を推進するものとなっているのだ。

フローリオを何よりも特徴づけているのは、言葉への偏愛である。フローリオは文体や修辭的な効果に執拗なまでにこだわっていた。『第一の果実』に顕著な、ユーフェイズム様式を想起させる美文や、修辭家の技量と機知が試される格言の多用。『第二の果実』で示されたペトラルキズム流行への目配り。韻律、文彩、語や語句のパターン化された配置など、修辭的裝飾の総目録のような『エッセー』の英語翻訳。フローリオのどの時期の著作にも、放恣なまでに過剰な修辭へのこだわりが見られ、さながら言葉の実験場のごとき様相を呈している。言語への関心が渦巻いていた時代において、フローリオの「美しく話し美しく書くことへの固執」(イエイツ 228)は、優美、精妙、機知に富む表現の範を示し、英語に何ができるかを知らしめた。彼の実験精神は、文体のみならず語彙にまで及んでいる。ウィリンスキーによれば、『オックスフォード英語大辞典』第二版において、フローリオは一番目に初出例の多い作家であり(一一四九語)、シェイクスピアは三番目(一九六九語)、一番多いのは文学言語としての英語を準備したチョーサーで二〇一二語を数える(注<sup>11</sup>)。(Wyatt 230に引用されている)フローリオはまぎれもなく、英語の発展期を牽引した文人の一人である。

#### 4. 外国語を学ぶこと——ふたたび、シェイクスピアへ

この美文家のイタリア人が、その文体を模倣されるにせよパロディ化されるにせよ、同時代の作家たちの靈感源であったことは想像に難くない。ここではフローリオから離れて、外国語の習得が自国語や自国民のアイデンティティの形成にいかん作用するのかを、シェイクスピア劇の語学学習場面をつうじて考えてみたい。

シェイクスピアの劇には外国語を学習している場面が二つある。一つは『ウィンザーの陽気な女房たち』において、教会学校の牧師エヴァンズがページ夫人の前で彼女の息子ウィリアムのラテン語の上達ぶりを試している場面であり、もう一つは、『ヘンリー五世』において、フランス王女キャサリンが侍女のアリスと英語の学習をする有名な場面である。いずれの場面にも共通しているのは、外国語の誤用が喜劇的效果をあげていること、そして、誤用が当事者の意図にない性的含意を帯びることである。そして最も重要なのは、誤用の場面が、言葉と権力の結びつきを露わにし、そこにいかなる関係が取り結ばれているのかを、(その場に居合わせた観客ではなくとも)われ

われに考えさせることである。さあ、私たちもレッスンに立ち会ってみよう。

ウィリアムのレッスンは、もう一人のウィリアムもグラマー・スクールで学んだと思われる、リリーとコレットの規範的なラテン語初歩文法書にそって進められる。子どものころにラテン語を学んだ観客にはなつかしい語形変化に苦しむウィリアム。ラテン語を解さないクウィックリー夫人が滑稽な合の手を入れ、そこにウェールズ人のエヴァンズが呼格 (vocative) を fuck を連想させる focative と訛ると、それをきっかけに三者のやりとりは濃厚な性的含意を帯びていく。

エヴァンズ ではウィリアム、複数のソコカクは？

ウィリアム 属格？

エヴァンズ そうだ。

ウィリアム 複数の属格は、ホルム、ハルム、ホルム。

クウィックリー夫人 ジェニーが「ハラム」って！くそ女！

坊ちゃん、そんないやらしい女のことなど、金輪際口にしてはなりません。

エヴァンズ 黙らっしゃい、ご婦ズン！（四幕一場四九一五五行）

聖職者のエヴァンズは知識人の言語であるラテン語にはつうじているが、ウェールズ訛りの英語を話す。ウィリアムは中産階級にふさわしくラテン語を学んではいるものの、まだ少年でしかない。クウィックリー夫人は家政婦で、人文的教養など望むべくもない庶民の女性である。民族、年齢、階級、性によって、主流の言語から分断されている三人が、言葉の誤用をめぐるおりにこのレッスン場面には、複雑な力学が作用しており、ただ滑稽である以上に観客をそれぞれの立場で楽しませたと考えられる。そこにはもちろん、グリーンブラットが言うように「優越感」(95)がある。言葉の誤用を楽しめるのは、それを誤用と認識できる人間であり、初心者を見下すといった気持も笑いのなかにこめられていただろう。アーデン版の编者オリヴァーは、この場面はラテン語を解する教養ある観客に向けられたものであり、そうでなければまったく面白くないであろう、と述べているが (xxix)、かならずしもそうではあるまい<sup>(注12)</sup>。謹厳な教師の前で、児童が必死でラテン語をひねりだすという状況そのものも面白いし、まして、そうしてひねりだされたラテン語がどうも下品な言い間違いであった (らしい) というこ

になると、たとえ内容が正確に理解できずとも、またそれがグラマー・スクールでのラテン語授業のパロディであると理解できずとも、雰囲気だけで十分に楽しめただろう。またラテン語はエリート層の言語なので、民衆階級にとって、特権的な言語が茶化されるところを見るのは痛快であり、彼らの抵抗精神を潜在的に刺激したとも考えられる。

もう一つのレッスン場面を見てみよう。これは、階級や性別にかかわらずイングランド人ならば誰でも話すとされる英語の誤用場面である。自国語が奇妙に話されているのを聞いたとき、それは自国民である観客にどう作用したのだろうか。間違った英語や訛りのある英語を話す外国人登場人物はイギリス・ルネサンス期の演劇に散見され、ステレオタイプ化されていた。クラウは「エリザ朝の舞台における外国人登場人物のプロークン・イングリッシュ」という端的なタイトルをもつ論文において、外国人が登場する劇を概観し、とりわけ舞台に登場する頻度が高いフランス人登場人物の誤用の特徴を示している。クラウは、フランス人がおかし典型的な誤りの一つとして、thがd (thatがdat)、whがv (willがvill) と発音されたり、語の最後にaが付いたり (arm-a) することを挙げている。(266) また、フランス人の男性登場人物は女好きで大言壮語をする激情家として造型されていると指摘しているが(259)、それは『ウィンザーの陽気な女房たち』に登場するフランス人のキーズ医師にも当てはまる。彼の訛りも振舞い方も、「フランス風」と範疇化されるステレオタイプにのっとって構築されているのである。そしてもちろん、そこには同時代の人々のフランス人に対するイメージやファンタジーが作用している。プロークン・イングリッシュを話す「ヘンなガイジン」という人物類型には、イングランド人が自らの言語的・文化的アイデンティティを再確認し明確化するという効果があった。「外国人」と一口にいても、どこの国の人間であるのか(フランス人であるのか、オランダ人であるのか、スペイン人であるのか、イタリア人であるのか、ドイツ人であるのか、ウェールズ人であるのか、アイルランド人であるのか)によって、観客の反応は異なっていただろう。言語の誤用をつうじての他者に対する「優越感」のくすぐられ方、そしてそうした定型化された他者表象に自らをイングランド国民として自己確認したり自己形成したりするありようも異なっていたはずである。そしてそれが、交戦中の敵国人であった場合、どうであろう。

クラウによれば、外国人やその人間が話す片言英語は、何よりもまず、舞

台上での「喜劇の源泉」(Clough 258)であった。フランス王女と侍女のレッスン場面も例外ではなく、『ヘンリー四世・第2部』のエピローグでは、「美しいフランス王女キャサリンであなたがたを愉快にさせましょう」(二八—二九行)という続編への予告がある。イングランドに行ったことがあるという侍女が、聞きかじりの怪しげな英語を王女に教える。フランス語訛りの不正確な英語を真面目に学習するうちに、思いもかけない卑猥な意味を誤って引きだしてしまうというこの場面は掛け値なく面白く、劇場では笑いが渦巻いていたに違いない。だがもちろん、それだけではない。『ヘンリー五世』は百年戦争におけるイングランドの勝利を描いた芝居であり、王女の英語学習場面にこめられた政治的含意については、つとに指摘されてきた<sup>(注13)</sup>。とりわけ、この印象的なエピソードは、アルフルールの攻略とアジャンクールの戦いというイングランドが勝利した戦いの間にはさみこまれており、明らかに、被征服者が征服者の言語を習うという植民地主義的文脈で読むことができる。ヘンリー五世のフランス王位継承権の要求に、フランス王は王女キャサリンとわずかな公爵領を提供するにとどまった。ヘンリーはそれを不服とし、フランスに侵攻する。王女だけではなく、フランス国土をも領有しようというのである。覇権を争う国家間の暴力行為は、典型的に、性的支配のイメージと重ね合わされる。フランスの「処女の町々」(五幕二場三二—三三行)は、一度も侵犯されたことのない乙女キャサリンの身体と同一視され、勝利者であるヘンリーの will (「欲望」または「子孫への遺産」)(五幕二場三二—三三行)の意のままになる。フランス王女の英語レッスンは、人体各部の英語表現をめぐって行われているので、女性の身体各部をばらばらにしてフェティッシュ化するブラゾンの手法を想起させ、ひいてはそれが戦争と性における暴力を想起させる。イングランドという国家の優位性と男性の優位性(女性に対する、とともに性的能力におけるイングランド男性のフランス人男性に対する)が、言語の収奪という観点から、端的に伝えられる。この滑稽なレッスン場面は、文脈そのものがあからさまに政治的含意をもち、言語の行使と権力の行使との結びつきを浮き彫りにすることによって、『ヘンリー五世』という劇全体を国民形成という視点から問いかけているのである。

## おわりに

シェイクスピアの外国語学習場面は同時代の演劇には見られないもので、

独創と考えることもできるが<sup>(注14)</sup>、実は、興味深い類似形がある。先に触れた語学教本である。『ウィンザーの陽気な女房たち』がラテン語教本を下敷きにしていたように、『ヘンリー五世』の場合にも、エリザベス朝に隆盛をきわめた語学教本の影響が窺える。エリザベス朝における近代諸語の語学教本は、その大半はフランス語を教えるものであったが、ラテン語教科書や中世以来のフランス語会話教則本の伝統の通りに、日常場面を題材にした対話集によって構成されていた<sup>(注15)</sup>。対話教本が扱う日常的な諸場面にはしばしば学校生活や授業場面が含まれており、身体の各部分の語彙は初学者がまず覚えるべきものであった(英仏両欄併記の教本が手元があれば、王女の英語もより正確であっただろう)。『ヘンリー五世』の創作時(チェーンバーズの推定によれば一五九八-一九九年)には、ホリバンドのフランス語教本『フレンチ・リトルトン』がよく知られていたし、フローリオのイタリア語教本『第一の果実』と『第二の果実』はシェイクスピアの作品のそこかしこに残響を響かせている。またシェイクスピアは、ジョン・エリオットのフランス語教本『オーソエピア・ガリカ』も読んでいたと思われる<sup>(注16)</sup>。シェイクスピアは、明らかに、語学教本の一般的な内容や体裁を心得ていた。シモニーニが主張するように、語学教本はシェイクスピアの材源の一つとして注目されるべきであろう。(328)

語学教本——ふたたびそれは、イギリス・ルネサンス期における新知識への欲求が実利的であるとともに、過剰なまでの言語的性質を帯びていたことをわれわれに思い出させる。初期近代イングランドにおいて、文化の習得と言語の習得は不可分である。フローリオは、イタリア語を教えることでイングランドの文化と言語の文明化を促すという文化媒介者の役割を果たしており、彼にとって、修辞の様式へのこだわりは、野蛮な英語と母語話者に作法を教え、洗練に導いていくことを意味していた。フローリオはイタリア語の多様性と精妙さをあますことなく表現したが、それはまた、英語の可能性を開示することにもなった。経験の地平を拓げ、世界を叙述するための新しい言語はいまや近代諸語である。シェイクスピアとフローリオの遭遇のどの地点においても、言語の可塑性へのあくなき関心が発露している。言語のコピアに身を委ね、言語の無限の諸世界を探求すること、それは時代の熱病であり、国語ひいては国民意識の形成を促す政治的行為であった。

ルネサンス期イングランドにおいて、英語に耽溺することは、個人的嗜好の問題にとどまらなかった。国民の自己形成の時代にあつて、同じく発展途上にある言語の可塑性を探求し実践することは、国民言語の形を定め、その創出にかかわることを意味していた。(正岡 192)

シェイクスピアとフローリオ——二人はともに、言語においてルネサンス期イングランドの過渡期の相を体現していた。二人はともに、「言語の問題」が文化の刷新や再編成に深く関わっている時代を生き、言語と文化がその輪郭を定めるのに大きく貢献したのである。

#### 注

\*本研究は、平成二三年度～二五年度成蹊大学研究助成の研究成果の一部である。

\*\*シェイクスピア劇からの引用は、『ウィンザーの陽気な女房たち』と『ヘンリー四世・第2部』はアーデン版、『ヴェニスの商人』、『恋の骨折り損』、『じゃじゃ馬馴らし』、『ヘンリー五世』はアーデン版第三シリーズに拠る。

- (1) 『ヴィーナスとアドニス』の献辞には、この詩がサウサンプトン伯のお気に召せば、それを励みに「閑暇の時をすべて活用し、より重みのある仕事をして閣下を讃えることを誓います」とある。「より重みのある仕事」が翌年出版された『ルークリースの凌辱』であるわけだが、本業である劇作や俳優業以外の仕事をするのを許した「閑暇の時」は、疫病による劇場閉鎖の時期にあたっており、シェイクスピアがこの時期にサウサンプトン邸に寄寓し、イタリア語教師として住み込んでいたフローリオに会ったと推測することも可能である。
- (2) 一六〇七年の四つ折本は二部現存し、大英博物館所蔵の刊本の題扉頁横の白紙頁にこの自筆の書きこみがなされている。Mcpherson, David. "Ben Jonson's Library and Marginalia." *Studies in Philology*. 71(1974) 七二頁を参照せよ。推奨詩を寄せた友人たちのうちの一人 I・F がジョン・フローリオであるとイエイツは推測しているが、ジョン・フレッチャーという可能性も大いにある。
- (3) 『マクベス』は、デンマーク国王クリスチャン四世が一六〇六年に訪英したさい、ジェームズ一世がこの義弟をもてなすための余興の一環として

創作されたという説がある。

- (4) フローリオはおそらくは一六〇四年に宮廷に出仕し、一六一九年のアン王妃の死まで王妃の「私室付き侍従」を務めていた。山田昭廣氏が作成したリスト「宮廷仮面劇の一覧表」によれば、ベン・ジョンソンはフローリオの在職中ほぼ毎年仮面劇の作者としてその上演に関わっている (171-72)。
- (5) ヴェネツィアの格言はフローリオが材源として用いたサンフォードの『歓びの園』からの借用であり、「ロンバルディアは世界の園」という慣用表現はすでに存在していた。
- (6) とはいえ、「夜の学派」説があまりにも有名なので、それとのバランスを取るためだろう、Woudhuysen は、「黒は夜が真に黒くなることを学ぶ学校である」という異説を紹介したり、「地獄のように黒い」は格言的な言い回しであると指摘したりしている (216)。
- (7) イェイツは後年、『ジオルダーノ・ブルーノとヘルメスの伝統』において、ブルーノの語る神性や法悦の中核にはヘルメス的なものがあると論じている。『英雄の狂気』の訳者である加藤守通は「解説」のなかで、ブルーノが合一をめざす神にはプラトンや新プラトン主義の範疇にはおさまらない「汎神論的」なところがあると述べている。(314)
- (8) 『俗語の豊かさ』は、フローリオの辞書の文献リストでは『トスカーナ語の豊かさ』という表題で記載されている。
- (9) 忘れ難い印象を読者に残す晩餐への道行は、ボッシーが言うように「叙事詩的」(76) な「不思議な話」(76) である。イェイツは『記憶術』において、旅程の途上で現れるロンドンの町のさまざまな場は、「ブルーノが『晩餐』での議論の主題を忘れないための」(357) 隠秘主義的記憶術における場であると述べている。
- (10) バルダッサレ・カステリオーネの『宮廷人』は一五六一年にサー・トマス・ホビーによって、ジョヴァンニ・デッラ・カーサの『ガラテオ』は一五七六年にロバート・ピータースンによって、ステファノ・グアッゾの『礼節ある会話』は一五八一年にジョージ・ペティによって英訳された。
- (11) ワイアットの注によれば、ウィリンスキーは初出例の数字は暫定的なものであるとしている。だが、名だたる詩人たちとともに名がのぼること

に鑑みても、フローリオの英語史上の功績が少なからぬものであることは推し量れる。

- (12) ラテン語の誤用がエリート層にも民衆階級にも喜劇的效果をもつことを私に教えてくれたのは、飯盛康史氏の口頭発表「シェイクスピア劇におけるラテン語の誤用と観客反応」（二〇一〇年のシェイクスピア・ワークショップ）である。
- (13) とりわけグリーンブラットの『シェイクスピアにおける交渉』八九一—一〇四頁と、本橋哲也『侵犯するシェイクスピア——境界の身体』（青弓社、二〇〇九年）第五章「兄弟の絆」を参照せよ。言語学習場面も含め、『ヘンリー五世』はたんなる国威発揚の芝居ではなく、戦争をつうじてナショナリズムの意味を問いかける芝居である。本橋が言うように、その意味においてこの芝居は長い「死後の生」をもつだろう。次も参照。井上准治「シェイクスピアの『ヘンリー五世』に於ける英雄物語の否定」『日本福祉大学研究紀要——現代と文化』第一一一号、（二〇〇五）：一一—二一。
- (14) ラドフもシモニーニも、言語学習場面がシェイクスピア以外にはイングランド演劇で類のないものであるということでは見解が一致しているが、材源を、ラドフは一六世紀フランスの笑劇に求め（シェイクスピアが知っていたかどうかの証拠はないと認めたくえで）、シモニーニは教授法の類似から同時代の語学教本に求めている。
- (15) 近代諸語は正規の教育カリキュラムに入っていなかった。そのため、学校で用いられたラテン語対話集とは異なり、近代諸語の教本は対訳形式で表記され独習できるようになっていた。
- (16) ジョン・エリオットはシェイクスピアより二歳年上で、同郷のウォリックシャー出身である。八〇年代にフランスに長く滞在した後帰国し、ジョン・ウルフのためにフランスのニュースや地誌書などの翻訳に携わっている。二人が九〇年代のロンドンで知り合った可能性は高い。リーヴァはデュ・バルタスの詩の一節をはじめとして、シェイクスピアの作品における『オーソエピア・ガリカ』との類似箇所を数多く指摘しており、材源の一つとみなすべきだと主張している。Lever, J.W. “Shakespeare’s French Fruits.” *Shakespeare Survey* 6 (1953): 79-90. イェイツの『ジョン・フローリオ』第七章と第八章および次も参照。蒲池美鶴「ジョン・エリオット」『シェイクスピアリアーナ』第九巻、（一九八九）：五二—六九。

引用文献

- イエイツ、フランス『記憶術』玉泉八州男監訳、水声社、一九九三。
- イエイツ、フランス・A『ジョン・フローリオ』正岡和恵、二宮隆洋訳、中央公論新社、二〇一三。
- グリーンブラット、ステイヴン・J『シェイクスピアにおける交渉』酒井正志訳、法政大学出版局、一九九五。
- ブルーノ、ジョルダノ『英雄的狂気』加藤守通訳、東信堂、二〇〇六。
- ボッシー、ジョン『ジョルダノ・ブルーノと大使館のミステリー』浜林正夫、鏡ますみ、葛山初音訳、影書房、二〇〇三。
- 正岡和恵「ジョン・フローリオと初期近代イングランドの言語文化」『異言語と出会う、異文化と出会う』風間書房、二〇一一、一六五-九九。
- 山田昭廣『イギリスの宮廷仮面劇』英宝社、二〇〇四。
- Bruno, Giordano. *The Ash Wednesday Supper*. Ed. and trans. Edward Gosselin and Lawrence S Lerner. Toronto : U of Toronto P, 1995.
- Clough, Wilson O. "The Broken English of Foreign Characters of the Elizabethan Stage." *Philological Quarterly*. 12 (1933) : 255-68.
- Eliot, John. *Ortho-epia Gallica.: Eliots Fruits for the French*. 1593. English Linguistics 1500-1800. 114. Menston, England : The Scholar Press, 1968.
- Florio, Giovanni. *Florios Second Frutes*. 1591. The English Experience. 157. Amsterdam : Theatrum Orbis Terrarum Ltd; New York : Da Capo Press, 1969.
- Florio, John. *His Firste Frutes*. 1578. The English Experience. 95. Amsterdam : Theatrum Orbis Terrarum Ltd; New York : Da Capo Press, 1969.
- Florio, John. *A Worlde of Wordes*. 1598. Anglistica & Americana. 114. Hildesheim, Ger. : Georg Olms Verlag, 1972.
- Lawrence, Jason. *'Who the devil taught thee so much Italian?': Italian Language Learning and Literary Imitation in Early Modern England*. Manchester : Manchester UP, 2005.
- Pfister, Manfred. "Inglese Italianato — Italiano Anglizzato : John Florio." *Renaissance Go-Betweens : Cultural Exchange in Early Modern Europe*. Eds. Andreas Höfele and Werner von Koppenfels. Berlin : Walter

- de Gruyter, 2005.
- Radoff, M. L. "Influence of the French Farce in *Henry V* and *The Merry Wives*." *Modern Language Notes* 48 (1933) : 427-35.
- Shakespeare, William. *Love's Labour's Lost*. Ed. H. R. Woudhuysen. The Arden Shakespeare. Third Series. London : Thomson learning, 2000.
- Shakespeare, William. *The Merry Wives of Windsor*. Ed. H. J. Oliver. The Arden Shakespeare. London : Methuen, 1971.
- Simonini, R. C. "Language Lesson Dialogues in Shakespeare." *Shakespeare Quarterly* 2 (1951) : 319-29.
- Yates, Frances A. *A Study of Love's Labour's Lost*. Cambridge : Cambridge at the UP, 1936.